

## 「高橋俊輔さんとの約 20 年間の思い出」

早稲田大学理工学術院（環境・エネルギー研究科）

教授 紙屋雄史

私がはじめて高橋俊輔さんとお会いしたのは、同氏がまだ三井造船に勤務されていた 2002 年の頃でした。早大大聖研にて行われていた研究打ち合わせの場で、同氏が私に“非接触給電技術”の面白さを語ってくれました。当時私は他大学の教員をしておりましたが、アフターファイブは大聖研に通っており、主に研究資金獲得のための申請書作成作業をしていました。

当時からそうでしたが、高橋さんは技術に対する好き嫌いが明確であり、ダメだと思った物は全く受け入れず、しかしながら自分が惚れ込んだものにはトコトンのめり込む、そういったタイプの人でした。非接触給電は同氏のツボにはまったらしく、その素晴らしさについて熱く語ってくれました。私は元々電磁気屋でしたので、大エアギャップ間の送電はやって出来ないことは無いが、効率の事を考えたらやめた方が良くと否定的でしたが、「回路屋の技術をうまく使うことでその問題がクリアできる」と、同氏があまりにも熱く語り続けるものですから、結局私は感化されてその世界に引きずり込まれてしまいました。

その後は、高橋さんが仲間や企業を束ね、そして私の方は予算申請作業を続けると言う役割分担で、非接触給電装置開発に係る多くの公的研究資金を得ることが出来ました。同氏の転職先である昭和飛行機工業にてオリジナルの給電装置やデモ用の電気バスを 3 台つくるなど (WEB-1, 2, 1A と命名)、派手に研究を進めました。私はその頃早大に転職し、以降は同氏と二人三脚で開発機器を持ち出しながら全国行脚しました。当時 (2002~2009 年頃) は今と違って非接触給電や電気バスの研究はそれほど盛んではなかったため、現物はとても珍しがられました。特に関西での受けが良く、堺・奈良・中之島・守山…と飛び回りました。実証試験の期間中は、当然ですが昼は仕事、そして夜は関係者との会食が続きました。高橋さんは美食家でした。酒よりも食事にこだわっており、郷土料理の店に良く一緒にいきました。ある日私が、「毎日良いものばかり食べていたらお金も体も続かないでしょ？」と尋ねた事がありましたが、その時同氏は答えました。「死ぬまでにあと何回夕飯を食べる機会があるか数えたことある？数えてみると意外と少ないでしょ？それを考えると、1 回たりとも不味いものを食って無駄にしたくないのですよ！」とのこと。仕事と同様に、食事に対しても全力投球の人でした。

同時期には、非接触給電以外の研究も一緒にやりました。高橋さんがいきなり紙屋研究室に知らない人を連れてきて、「こいつと一緒に研究をやってくれないか…」。始まりはいつもこんな感じでした。同氏がその訪問者の研究の良いところを私に熱く語り、そして私はその勢いに負けて、結局 LIB やモバイル機器の研究などいろいろやりました。上手くいったものもあれば失敗したものもあり、成果はいろいろでしたが、どれも学生の修士論文研究としては楽しい内容であり、そして価値のあるものとなりました。

2010 年頃になると、国内のワイヤレス給電研究（そのころから非接触ではなくてこんな洒落た名前と呼ぶようになりました）も盛んになってきました。これは世の常ですが、最初に始めたものがそのアドバンテージを維持し続ける事はとても難しく、結局は後発隊から追いこされる運命にあります。それまで一緒にやっていた企業が、「この技術はやはりビジネスにつなげるのが難しい」と手を引き始め、ちょっとチームワークが乱れ始め、高橋さんが仲間の企業と喧嘩をして紙屋研に帰ってくることが増えました。同氏は、企業が商

売につながらない物に力を注がない事は充分承知しているのですが、ワイヤレスには採算度外視で先行投資してほしかったのです。愚痴を聞く機会が多くなりました。

その様な事が続き、私は早大紙屋研での研究方針を転換することにしました、実用化のより近いと思われる電気バスの方に軸足を移し、ワイヤレスは世の中の活動を応援する側に立とうと決めました。高橋さんにもそのことを伝えて研究メンバーからは外れてもらい、同氏には以後ワイヤレスに係る最新動向調査や早大研究を世にアピールする広報役をお願いすることにしました。前者は海外調査が中心となるため人件費や旅費を集めるのが大変でしたが、現地との事前調整等、同氏の行動力は抜群であり、欧州・米国・中国等から貴重な情報を集めることが出来ました。経費のほとんどが公的資金によるものであったため、収集情報は報告会終了後には全て公開してもらいました。個人的には、同氏のこの活動が最も世に貢献したのではと思っております。後者の早大広報役の仕事については、2010~2015年頃に製作した3台の電気バス（WEB-3, 4, 3A）の試験中に、紙屋研学生が現場で収集したものの学術論文を書くにはちょっと泥臭すぎるようなデータを、同氏のセンスで小奇麗にまとめてシンポジウムやセミナー等でしゃべってもらいました。これは、早大研究のアピールにつながったと思っています。そう言えば、このころの名刺の消費量は半端じゃなかったですね。いつも200枚ずつ発注してあげたのですが、半年に一回ほど私のところに来ては「名刺がきれたので再来週までになんとか…」これは、調査や広報活動が順調という証拠でしたので嬉しい悲鳴でした。こんな感じで活動の軌道修正をお願いし、同氏もそれにこたえてくれたのですが、やはり高橋さんはワイヤレスに係る純粋な研究活動も捨てきれなかったようで、この頃から早大以外で活動する機会が増えました。

2018年になると高橋さんも70歳となり、早大の定年ルールで雇用が不可能となりました。しかし、肩書だけは継続できたため、ボランティア状態でしたが研究室への情報提供をお願いしておりました。メールでのやり取りが主となりましたが、週に一度は研究に役立つような最新情報を送ってくれました。たまに、郵便物を受け取りに研究室にいらっしゃったのですが、あまり顔色が良くないのでちょっと心配していました。

2020年に入ったころから、入退院を繰り返されていたということを知りました。頻度は減ったものの、メールでの情報提供は相変わらずでしたので、調子が悪いことは全く知りませんでした。手元に残されている最後のメールは、同年5月上旬にもらった「超急速接触充電規格」に係る中国の情報でした。そして、うっかり消してしまった事が後悔されるのですが、本当に最後のメールはさらに後のものでして、それには東京理科大居村先生のワイヤレス研究への期待が綴られていました。やはり最後は“ワイヤレス”でした。

その後、高橋さんと連絡を取り合うことが出来なくなり、そして7月下旬に奥様から同氏が逝去されたことのご連絡を頂きました。今年はこのような状況でしたので、お別れにも行けずに誠に残念でした。奥様からのご依頼により、研究室にある遺品の整理を行いました。机の中からワイヤレス研究関連のスケッチが色々出てきました。眺めていると、工学的に優れていることは勿論、何か芸術的な香りもするようなものばかりでした。そういえば同氏は書道の先生でした。電気バス全国行脚の際に一緒に美術館に行ったこともあり、音楽も含め良く芸術の話もしたものでした。

知り合ってから約20年という歳月の中で、高橋さんから技術に対する熱い思いや多くの知見を頂きました。今後は、大学人という立場で、私が頂いたものを学生諸君に伝えていこうと思っております。高橋俊輔さん、本当にありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。



写真1：高橋さんお気に入りの早大電気バス1号車“WEB-1”レプリカモデル

（紙屋研の研究室紹介用として使うために、日野自動車さんに頼んで特別製作してもらったものです。この写真からは確認できませんが、床下には実車と同様に昭和飛行機時代の高橋さんが開発に携わったワイヤレス給電装置がついています。実は、「俺が死んだら、この模型も棺桶に入れて一緒に焼いてくれ！」と言われていたのですが、約束は果たせませんでした。）

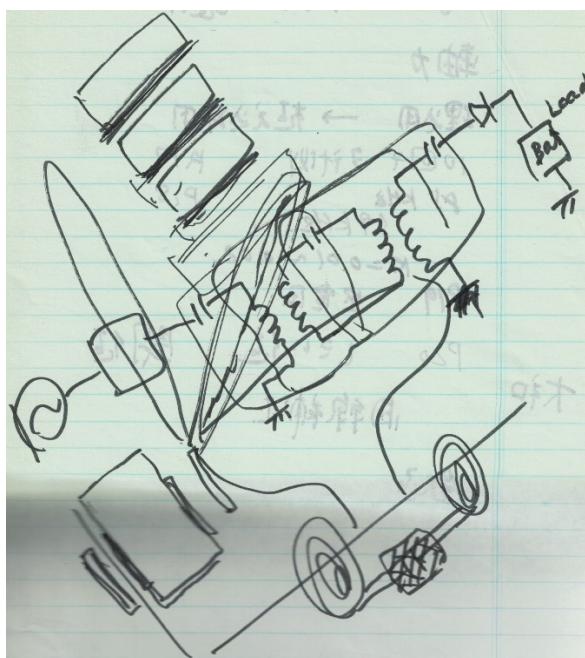
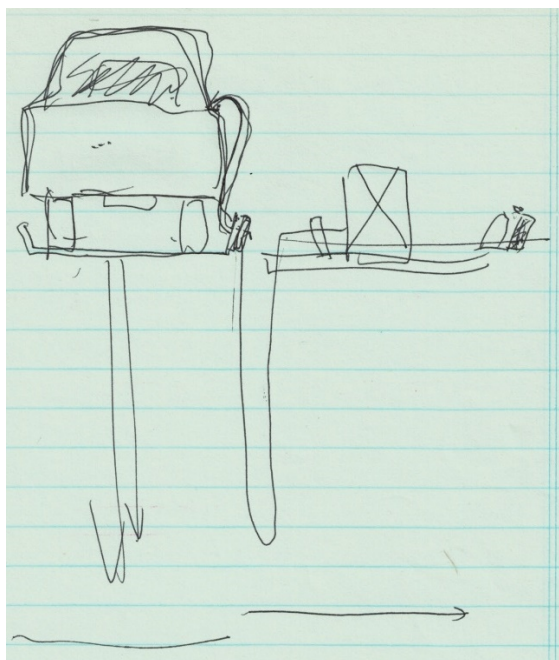


写真2：高橋さんが描いたワイヤレス研究関連のスケッチ